

2025 年 10 月 12 日 説教「公義と神の愛を放置し」

ルカの福音書 11 章 42～48 節

11 章は後半から、パリサイ人や律法の専門家との関わりについて、語られています。前段では、食事前に手を洗わなかったイエスに端を発して、語られた主の言葉を学びました。今朝はそのテーマが続きます。

1. なおざりにしていること (42～43 節)

- ①公義と神の愛 (42) 『**だが、わざわざいだ。パリサイ人。おまえたちは、はっか、うん香、あらゆる野菜などの十分の一を納めているが、公義と神の愛はなおざりにしています。』**

イエスはパリサイ人を「わざわざいだ」と言い、「おまえたち」と激しく名指しされて言われます。つまり、パリサイ人達は確かに行っているのです。何をかと言えば、中近東にも野生していて薬用、芳香などに用いた「はっか」、強いにおいを持った「うん香」、様々な野菜などの十分の一を宮に納めたのです。イエスが問題にされるのは、「律法の中ではるかに重要なもの」(マタイ 23:23)である「公義と神の愛をないがしろにしている」と言われるのです。マタイには「正義とあわれみと誠実」(同箇所)とあります。

- ②何が大切なのか (42) 『**これこそしなければならないことです。ただし、十分の一もなおざりにしてはいけません。』**

イエスは「これこそしなければならない」と言われて、パリサイ人が見ていること、行なっていることの間違いを指摘されているのです。前段で、外側のことをきよめることに一生懸命になり、より大切な内側のことはなおざりにされていると言われたのに通じます。その後、「十分の一もなおざりにしてはいけません」とあるように、イエスは律法を軽んじているのではなく、むしろ律法が全うされることを大事にされているのです。

- ③挨拶されることが好き (43) 『**わざわざいだ。パリサイ人。おまえたちは会堂の上席や、市場であいさつされることが好きです。』**

「わざわざいだ、パリサイ人」とイエスは繰り返されます。「忌まわしいものだ、パリサイ人」とあるほどですから、かなり激しいのです。会堂の上席とは特別席であり目立つのです。そこに座ることを好み、市場に出かければ、人々から敬われて挨拶されるのが好きなのです。そのようにして、彼らのプライドは満足させられ、したり顔になるのです。

2. 反発する律法の専門家 (44～45 節)

- ①人目につかぬ墓 (44) 『**わざわざいだ。おまえたちは人目につかぬ墓のようで、その上を歩く人々も気が付かない。』**

律法には、「墓に触れる物はみな、七日間、汚れる」(民数記 19:16)とあります。ここでイエスは、パリサイ人は外側からはわからない墓のような存在だということです。つまり、歩いても気が付かない墓のようで、そこを通って汚れてしまっても気が付かない、そのような存在だと言われるのです。それほどに激しく非難しければ、気が付かないと思われたからこそ、幾重にも、言葉を重ねておられるのです。

②侮辱です(45)「すると、ある律法の専門家が、答えて言った。『先生。そのようなことを言われることは、私たちをも侮辱することです。』」

そこには、イエスを食卓に招いたパリサイ人以外にも、その仲間がいたようです。その一人である律法の専門家が述べたのです。『先生』と呼びかけて、それなりに敬意を払っているのでしょうか。とはいえ、相当に怒っていると思います。彼は、言いました。『そのようなことを言われるのは、私達をも侮辱することです』。パリサイ人達はもちろん、律法の専門家に対しても、無礼極まりないことだと息まいたいのです。

3. 負いきれない荷物を負わせ(46～48節)

①荷物に指一本も(46)「しかし、イエスは言われた。『おまえたちもわざわいだ。律法の専門家たち。人々には負いきれない荷物を負わせるが、自分は、その荷物に指一本もさわろうとはしない。』」

しかし、イエスはひるむことはありません。それどころか、さらにその主張を発展させていくのです。その矛先を律法の専門家に向けて、「あなたがたは、人々には負いきれない荷物を負わせるが、自分は、その荷物に指一本さわろうともしない」とは、非常にわかりやすいたとえです。律法や律法にもない細則を持ち出して、人々をがんじがらめにしておいて、その根本問題には手をつけようとしなさいと言われていたのです。

②預言者たちの墓を(47)「『わざわいだ。おまえたちは預言者たちの墓を建てている。しかし、おまえたちの父祖たちが彼らを殺しました。』」

イエスの追及の手は緩むことはありません。律法の専門家たちが、預言者たちの墓を建てて、偲んでいることについて言い及びます。彼らがしていることは矛盾をしているというわけです。つまり、イスラエルの民の信仰と霊性を鼓舞してきた預言者達は、迫害も受けました。ところが、実をいえば、迫害者の張本人は律法の専門家達と同じような思想を持つ人々であったのだということを語られるのでした。

③父祖のしたことの証人(48)「『したがって、おまえたちは父祖のしたことの証人となり、同意しているのです。彼らが預言者たちを殺し、おまえたちが墓を建てているのだから。』」

つまりは、かつて預言者たちはまことの神に立ち返ることを訴えたのです。しかし、律法を盾にする人々は、外側だけを整えることに終始し、生きた神を見上げることを阻んでしまっていたのです。この時代の律法の専門家も同じことで、彼らは父祖の証人となり、あげく今となっては評価されている預言者達の墓を建てている。何という矛盾。しかし、彼らは目の前に、まことの預言者と相対していることをわからなかったのです。

《結論》

今朝の聖書箇所要点である42節に焦点をおきとめます。

「だが、わざわいだ。パリサイ人。おまえたちは、はっか、うん香、あらゆる野菜などの十分の一を納めているが、公義と神の愛はなおざりにしています。」

パリサイ人は外側においては、律法の求める神への献身を実行していました。それについては、43節にあるように、イエス自身も「なおざりにしてはならない」と伝えています。しかし、その前に「これこそしなければならぬ」と述べられています。それは「公義と神の愛」だと言うのです。これについては、律法のなかにおいて「はるかに重要なこと」とイエスは言われています(マタイ 23:23)。公義というのは、人間の義ではなく、神の義です。「神の国と神の義を求めなさい。」(マタイ 6:33)とありますが、それこそが信仰者が求めるべきものです。神の義こそが不義なる人間を義と認めることのできるのです。すなわち、神の義こそが人間を救うことができるのです。パリサイ人が追求していた律法そのものは正しいのですが、それを遵守しているかどうかを、人間が監視したり、制御したりすると、本来の律法の根本精神が見失われてしまうのです。

それでは律法の根本精神とは何でしょうか。それはもう一つ述べられた、「神の愛」と関係しています。マタイの福音書ではそこを、「あわれみと誠実」と記しています。律法学者が「律法のなかで何が大切ですか」と問うた時に、イエスは第一に、「心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして、あなたの神を愛せよ」(申命記 6:5)とし、第二には「あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ」(レビ記 19:18)とし、これらこそが「律法全体と預言者」だとしています(マタイ 22:36～40)。つまり、この二つに旧約聖書全体がかかっているということです。言い方を換えれば、これらを見失ってしまえば、律法が生きて働く可能性はなくなってしまうということです。実を言うと、ルカの福音書 10:26 以下を見ると、律法学者たちもそれなりに捉えていました。しかし、イエスによって「良きサマリヤ人」のたとえ話が引き出されるほどに、律法学者たちのうちでは、その理解と実践が空回りしていたのです。46節において、人々に荷物を負わせても、自分では荷物に指一本もさわろうともしないと、イエスから痛撃されたように、そこにパリサイ人や律法学者の盲点があったのです。公義と神の愛を放置していたのです。

それでは、私達はどうかということ、気をつけないとパリサイ人と同じような見方をしてしまうことがあります。人の行動や言動を心の中でさばいたりすることはないでしょうか。それも、聖書の言葉を伝家の宝刀のように振りかざして、はかりにかけてしまうことがあります。神の義と神の愛をなおざりにしてしまっていることがないでしょうか。自らのうちに注がれる主の救いの恵みを忘れたくありません。主イエスがこれほど激しく言われているのは、クリスチャンにも注意をされているのだと思います。まずは、自分の胸に手をおいて、祈りましょう。御言葉よって生きる道を求めていきましょう。